

研究ノート

無アクセント方言における句、発話イントネーションの究明

馬場良二

要旨：

東京方言では、「箸」と「端」の語義が語アクセントによって弁別される。また、「食べ、終わった」と「食べ終わった」のように、音連鎖を句に分けたり、一つにまとめたり、あるいは、「やせた女の子ども（女がやせている）」と「やせた女の子ども（女の子がやせている）」のように語のかかり受けを示したりする。さらに、発話において、「田中さんはコーヒーが好きですか？（他の人でなく、田中さんが）」と「田中さんはコーヒーが好きですか？（他の物でなく、コーヒーが）」のようにプロミネンスを表したり、問いかけ、応答、命令などの発話機能や驚き、無関心、懷疑、失望などの感情を表現する。

一方、熊本方言で語アクセントは語義を弁別せず、語に固定した音調の型もない。つまり、「箸」と「端」とで音調による違いはなく、どちらの語も「低低」、「低高」、「高低」、「高高」のどれでも発音されうる。

熊本方言話者は、語アクセントなしでどのようにして句イントネーションと発話イントネーションとを生成しているのだろうか。どのようにして音声的に発話を句に切り分け、どのようにして句や発話の構造、そして、プロミネンスの有無とその位置を知覚しているのだろうか。熊本方言の句イントネーション、発話イントネーションはどのような働きをするのだろうか。

多型アクセント方言である東京方言と無アクセント方言である熊本方言とを実験音声学的、音韻論的に対照することにより、日本語における語ア

クセント、句イントネーション、発話イントネーションの本質が、そして、これらが形成する日本語音調の体系と構造とが明らかとなるだろう。

まずは、熊本方言話者からの聞き取りを丁寧に行い、聴取実験を重ねていく必要がある。

キーワード：無アクセント方言、語アクセント、句イントネーション、発話イントネーション、音調の機能、方言の対照言語学

On the Generation of Phrasal Intonation and Sentence Intonation in the case of a Non-Accent Dialect

Abstract :

The Tokyo dialect distinguishes word meaning as ‘hasi^ˈ (chopsticks)’ and ‘hasi^ˈ (end, edge)’ by word accents. Its phrasal intonation divides an utterance into some meaningful phrases as ‘tabe^ˈ o^ˈwatta (ate and finished)’ and ‘tabe^ˈo^ˈwatta^ˈ (finished eating)’ and indicates the syntactical structure of words as ‘yaseta^ˈ onna no^ˈ kodomo^ˈ (a child of a skinny woman)’ and ‘yaseta^ˈ onna^ˈ no kodomo^ˈ (a skinny female child).’ And its sentence intonation indicates the prominence as ‘Ta^ˈ naka-san wa koohii^ˈ ga suki desu^ˈ ka? (Is it Mr. Tanaka that likes coffee?)’ and ‘Tanaka-san wa koohii^ˈ ga suki desu^ˈ ka? (Is it coffee that Mr. Tanka likes?),’ the functions of utterances as questioning, answering and order, and the speaker’s emotions as astonishing, indifference, suspicion and disappointing.

Kumamoto dialect is a non-accent dialect which does not distinguish the word meanings by accents and whose words have no accent patterns. So there is no difference of accent between ‘chopsticks’ and ‘bridge’ and both of them are possibly pronounced with low-low tone, low-high tone, high-low tone or high-high tone.

How can the Kumamoto dialect natives generate phrasal and sentence intonation without word accent? How do they divide an utterance into

phrases phonetically? How do they express the syntactical structure of phrases and utterances, the prominence, the functions of utterances and the speaker's emotions? And how do the phrasal and the sentence intonation work in Kumamoto dialect?

Contrasting the Kumamoto dialect and the Tokyo dialect, we can clarify the system and the structure of the Japanese accent and intonation, and the relation between them.

We have to interview precisely the natives and practice some audio experiments.

key words : non-accent dialect, word accent, phrasal intonation, sentence intonation, functions of intonation, contrastive linguistics between dialects

1. はじめに

私は東京方言話者で、熊本方言を母語としない。平成元年に現在の勤務校である熊本県立大学に赴任してきたころ、郷に入れば郷に従え、それに、方言というものに大変な興味があった。だから、身につけようとしたが、学生が話しかけてくるとき、彼らは共通語を使う。なかなか覚えられないし、第一、聞いたままをくり返しているつもりなのに、それは違うと笑われる。いつの頃か、習得するのをあきらめた。

学生が話しかけてくる共通語はたくみで、ほとんどアクセントを間違えることはない。が、だいたい学生は「箸」と「橋」、「雨」と「飴」との区別がつかない、アクセントはわからないと言う。

2. 無アクセント方言

『国語学大辞典』の「一型アクセント」の項を見ると、「アクセントにつ

いて全国を大きく分類すると、東京語や京阪方言のように、拍単位ごとに複数の型をもち、語によってアクセントの区別がある方言と、そのような型の区別をもたない方言とに分かれる。前者を多型アクセント、後者を一型アクセントと言う。」「一型アクセントは、宮崎県都城方言のように拍単位ごとに一つの型しかもたないものと、宮城県仙台方言などのように、音相の高低関係が一定しないものとに分けられる。両者を区別する場合には、前者を狭義の一型アクセント、後者を無アクセントと呼ぶことがある。方言の話し手が語や文節などを一定の高低関係の相に発音しようとする意識をアクセントの「型知覚」と呼ぶが、多型アクセントや（狭義の）一型アクセントの話し手はこの型知覚をもつのに対し、無アクセントの話者はこれをもたない。」とある。

日本語のアクセントは大きく多型アクセントと一型アクセントに分けられ、その一型アクセントは狭義の一型アクセントと無アクセントに分けられるとし、多型アクセントの話し手と狭義の一型アクセントの話し手とはアクセントの型知覚をもつが、無アクセントの話し手はこれをもたないと述べている。そして、「無アクセントについては、特別のイントネーションが加わらない丁寧な発音による型（反省的型）は、どの単位も平板型一種のみであると解釈して、これを平板一型と呼ぶことがある」の記述のあと、その「無アクセント（平板一型）は、南奥羽から北関東にかけての地域と九州中央部に広い領域をも」つとしている。この「九州中央部」に熊本がはいっている。

熊本方言では、アクセントで語意を弁別することはないし、語が特定の音調を持つこともない。たとえば「箸」だが、何でもスプーンで食べたがる子どもにむかって「箸を使わないの?」と言うとき、「は^ハしばつ^ツかわんと^ンお?」（音声1 ）、「は^ハしばつ^ツかわんとお?」（音声2 ）のどちらでもよく、スパゲティを箸で食べている人に驚いて「箸を使うの?」と言うときは「は^ハしば^バつかうと^ンお?」（音声3 ）となり、「箸」が高低でも低高でも、そして、低低でも発音される。

また、東京方言でも英語、ポルトガル語でもアクセントによって語の意味を弁別する¹。が、韓国語のソウル方言やフランス語ではアクセントに

よる語の意味弁別はない。熊本方言は、特にめずらしい言語だとは言えない。たとえば、「箸を使わないの?」と「橋を渡らないの?」とは、「は¹し²ば³つ⁴か⁵わ⁶ん⁷と⁸お⁹?」(音声1 )、「は¹し²ば³わ⁴たら⁵ん⁶と⁷お⁸?」(音声4 )でも「は¹し²ば³つ⁴か⁵わ⁶ん⁷と⁸お⁹?」(音声2 )、「は¹し²ば³わ⁴たら⁵ん⁶と⁷お⁸?」(音声5 )でもよく「箸」と「橋」とで音調が変わることはない。

ただ、語には音調の型がないのだが、発話にはあるようだ。「は¹し²ば³つ⁴か⁵わ⁶ん⁷と⁸お⁹?」「は¹し²ば³つ⁴か⁵わ⁶ん⁷と⁸お⁹?」「は¹し²ば³つ⁴か⁵わ⁶ん⁷と⁸お⁹?」のどれも言わないと言う。語は無アクセントだけれど、発話には型があらわれる。

秋山・吉岡(1991)によると、熊本県は大きく平板一型アクセントの地域(「熊本市を含めて、県の北部、中部、東南部の広い範囲」と二型アクセントの地域(「熊本の西部海岸沿いおよび西南部」)に分けられ、後者は「アクセントによる型の区別を持っている」。そして、「平板一型アクセントは熊本の方言の主流といえるもので、その地域はしだいに拡大する方向にある。しかし、まったく一色となるのではなく、現実には複雑なゆれをみせる。」として、北部・中部の平板一型は「一拍語 ○▼、二拍語 ●○・○●▼(文中では○●▼)、三拍語 ○●○・○●●▼(文中では○●●▼)」(▼や▼は助詞)、南部(球磨郡東部)に分布する平板一型は「一拍語 ●▼(または○▼・○▼)、二拍語 ●○・●●▼、三拍語 ●●○・●●●▼」(●と▼とが「高」となる)と述べている。調査協力者に発音してもらって、語アクセントや文節のアクセントを聞き取っているのだが、実際に聞き取っているのは発話のイントネーションである。「特別のイントネーションが加わらない丁寧な発音による」と、1語発話の音調がこれらの型であられるのだ。

3. 語アクセント、句イントネーション、発話イントネーション²

研究者たちは、語、あるいは、語に助詞のついた文節を発音させると、

語のアクセントが採取できているように思っているようだ。しかし、語でも文節でも、発せられればそれは「発話」であり、発話には何らかの発話イントネーションがともなう。

佐藤（1977）の「アクセント」の項には、「アクセントには、東京アクセントなどにおける「雨」（アメ）と「飴」（アメ）のように同音語を区別する働きや、（ムカシ アルトコロニオジーサントオバーサンガスンデイマシタ）のように、文節などにまとまりを与える働きがある」、「文の中で文節などの切れ目を示す働きが重要である」とある。

佐藤（1977）の表記は、文節ごとの高い拍に「―」を引いている。しかし、実際にこのような発音がなされることはまれで、特別な文脈がなければ「ムカシアルトコロニオジーサントオバーサンガスンデイマシタ」となろう。意味のまとまりごとに高いところが一か所である。「アクセント」を語に付与された音調だとすると、この発話の高低はアクセントでない。「トコロニ」、「イマシタ」は語全体が低く発音され、「スンデ」もその可能性がある。音声としての語に付与された高低は、語アクセントのみではなく、句イントネーションと発話イントネーションとが複合したものなのだ。

たとえば、川上（1975）の「まえがき」には、三島由紀夫「燈台」のセリフについての記述がある。

正子：うそつき。何も見えやしないじゃないの。（なおも双眼鏡をのぞきつつ）燈台だけだわ。燈台の灯りだけ見えるのね。……おや暗くなった。……また明るくなったわ。……でも海から見るほど明るくないのね。燈台の小さい窓が見えるわ。**ぼんやり明るいだけだわ。**……燈台の窓ってかわいらしいのね。

このセリフの「**ぼんやり明るいだけだわ**」は、「ぼんやりあかるいだけだわ」（音声6 ) と発音してはならない。「どこがまちがいだ。アクセント辞典にそう出ているではないか——と言われるかもしれません。し

かし、この文の意味を考えてください。」「この文が言いたいのは、明るいことではない。明るくないことです。」「この「だけ」は、欲を言えば「ぼんやり」だけにかかるように発音したい」、「そのためには「ぼんやり」と「明るい」とが最高に緊密に結び付いていなければならない」。それを「あかるいだけ」と発音したのでは「ぼんやり」と「だけ」とは縁が切れてしまう。「ぼんやりあかるいだけだわ」（音声7 )と発音しなくてはならない、と言っている。

また、テレビのナレーションの例もある。子ども向けの科学番組で「水の中にも虫はたくさんいます。「マツノムシも水の中でくらす虫です」（音声8 )という発音があった。これも間違いである。水の中の虫であることはわかっている。わかっていることがらの語アクセントを忠実に音声化すると、プロミネンスを置いて知覚されてしまう。できれば、「マツノムシも水の中でくらす虫です」（音声9 )としたいが、音調のない語句がつづくと思苦しい。「マツノムシも水の中でくらす虫です」（音声10 )という発音が妥当である。

日本語教師が外国人に日本語音声を教える場合、語アクセントを教え、それが連なった場合の語アクセントの統合規則と句イントネーション、発話イントネーションを教えれば、一応、音調を習得させられる。

4. 音調の機能

語アクセントはタキが重要で、共通語の語にはタキのある語とない語とがあり、タキの有無とその位置とでその語のアクセントがきまる。その語のアクセントの型を連ね、そこに句イントネーション、発話イントネーションの規則を積み上げていけば、発話全体の音調が生成される。

音調形成の基本には、語アクセント、句イントネーション、発話イントネーションが考えられ、東京方言の場合、語アクセントは意味を弁別する。さらに、音調は「手紙出した／手が乱した」、「宴会は全員がシャベットを食べ、終わった／食べ終わった」³のように発話中の言語要素間

の切れ目を示し、「やせた女の子ども（やせた女／やせた子）」、「きのうもらった本を読みました（きのうもらった／きのう読んだ）」⁴のように係り受けを示す。発話レベルでは、「田中さんはコーヒーが好きですか（誰が？／何が?）」のようにプロミネンス⁵を、「今すぐ食べる（返事を要求した問いかけ：イ^マスグタ^{ベル}／質問に対する答え：イ^マスグタ^{ベル}」／相手の言動に驚きあきれて：イ^マス^グタ^{ベル}（全体に上昇）／命令：イ^マス^グタ^{ベル}（全体に下降）」のように発話の機能⁶を、そして、「そうですか：軽いあいづち、無関心、気軽にたずねる、うたがって、感心して、がっかりして」のように話者の感情を表現する⁷。ほかに、「心の無垢な子どもたち」が「子どもの中の心が無垢な子どもたち」（制限的用法：コ^{コロノムクナコ}ドモ^{タチ}）と「子どもというのはみんな心が無垢だ」（非制限的用法：コ^{コロノムクナコ}ドモ^{タチ}）を言い分ける。上記の川上とマツノムシは、係り受けとプロミネンスの例であろう。

発話構成要素すべてのアクセントを一つ一つ音声化し、発話全体をそれぞれの要素に切り分けると、言語化した事象を完結した形で確認する効果があるようだ。相手の言動に驚きあきれたり、命令したりというとき、「今」「すぐ」「食べる」一つ一つに音調が付与されるのは、その確認効果があるからだろう⁸。

ここにあげた音調の機能のうち、プロミネンス、発話機能、感情表現では、ピッチの高さや最高、最低の差が大きな役割をはたす。

一方、言語要素間の切れ目や発話を構成する言語要素の係り受けを示す、制限的用法か非制限的用法かを言い分けるというのは、煎じ詰めれば、音連鎖のどこに区切りをいれるか、あるいは、いれないかということである⁹。川上の例にあるように「ぼんやりあかるいだけだわ」の「ぼんやり」と「だけ」とを一つに合わせることはできないが、「ぼんやり」と「あかるいだけだわ」とを切ってしまうのを避けることはできる。

5. 音韻の機能

Bühler (1934) は言語記号に *Ausdrucksfunktion*（表出機能）、*Appellfunktion*（呼び掛け機能）、*Darstellungsfunktion*（叙述機能）の三つの機能を認め、Trubetzkoy (1989)¹⁰ はこれを音韻論にあてはめている。

Bühler の *Ausdrucksfunktion* に対応するのは *Kundgabephonologie*（告知音韻論）で、「人間の言葉の告示機能は話し手を特徴づけることにある」、「これらの手段によって、話し手が一定の年齢や社会階層に属すること、さらに話し手の性別、教養の程度、出身地等を示すことが出来る」トルベツコイ (1980) p.19、*Appellphonologie*（呼び掛け音韻論）では *Appellmittel*（呼び掛け手段）を考察し、「呼び掛け手段あるいは喚起手段は聞き手の中に或る感情を呼び起こす、「喚起する」ことに用いられる」p.24、そして、「(*Darstellungsfonologie*)「叙述音韻論」が、言語の、叙述にとって有意味な音的手段の全領域を研究対象とする」p.28。このうちの *Kundgabephonologie* は *paralinguistic* なもの、*Darstellungsfonologie* は *linguistic* なものである。

その *Darstellungsfonologie* の領域には「3つの異なる機能をはっきり区別することが出来る」p.35 とし、*kulminative Funktion*（頂点的機能）、*delimitative Funktion*（限界的機能）、*distinktive Funktion*（弁別的機能）をあげている。*kulminative Funktion* は「当該の文に幾つの「単位」（＝単語あるいは語群）が含まれているかを示す」、*delimitative Funktion* は「2つの単位（＝結びつきの強い語群、単語、形態素）の間の境界を示す」、*distinktive Funktion* は「意味を持った個々の単位を互いに区別する」。そして、「頂点的機能と限界的機能を持つ音特徴は言語単位にとって不可欠のものではない」、「3つの機能のうち、弁別的機能が最も重要なものということになる」としている。

ここでトルベツコイが論じているのは、語音の音韻論であるが、これら三つの機能は音調にもあてはまる。東京方言において、「箸」と「端」の語義が弁別されるのは *distinktive Funktion* によるものであり、「ぼんやり

あ「かるいだけだわ」、「ぼんやりあかるいだけだわ」では、音調が *kulminative Funktion* をはたして、「高いところ」がそれぞれの発話を三つの構成要素、イントネーション句に分けている。そして、切れ目の位置は、句イントネーションの *delimitative Funktion* が手がかりである。

一方、熊本方言で、音調は *delimitative Funktion* を有しない¹¹。音声言語は線状の音連鎖だから、何かしらが *delimitative Funktion* を果たしているはずである。音調が語義の弁別機能を持たない熊本方言で、音調はどのような働きをしているのか、明らかにしていきたい。

6. 熊本方言の音調

狭義の一型なら型があるが、熊本方言は無アクセントだから型がない。語アクセントの型をつらねて句イントネーションを特定し、発話イントネーションを生成するということができない。

熊本方言の発話イントネーションを体得するにはどうしたらいいのだろうか？

東京方言における句イントネーション、発話イントネーションの機能を熊本方言はどのように実現しているのだろうか。熊本市内方言話者に聞いてみた。

「宴会は全員がシャーベットを食べ、終わった」での切れ目を音調で表現することはできず、「食べたけん、終わったたい」とする、かかり受けの「やせた女の子ども」も、プロミネンスの「田中さんはコーヒーが好きですか」も、「やせた女のたい、子どもたい」、「田中さんがたい。コーヒーば(ね)、好かすと?」のように切り分け、強調したいところで一度切ったり、声を強くすると言う¹²。「今すぐ食べる」のような言い切りの形の熊本方言の場合、音調だけで命令を表現することはできない。一方、同じ「箸ば使うと?」でも、単なる問いかけであれば「は⁷しばつかうと「お?」(音声 11 )であり、驚きの声であれば「は⁷しば⁷つかうと「お?」

（音声 3 ）である。また、熊本方言の特徴だが、問いかけのときに発話末が下降し「きつ[↑]か[↑]ねえ」（疲れましたか？：音声 12 ）、同意を求めるときに発話末にむかって徐々に上昇する「[↑]きつ[↑]か[↑]ねえ[↑]」（疲れましたねえ：音声 13 ）。問いかけ、驚き、同意を求めるなどで発話イントネーションは変化する。係り受けもプロミネンス、命令も表せないが、種類によっては発話機能も感情も表現し得るということなのだろうか。

前川（1997）は、「（熊本）方言のイントネーション規則が規定しているのはひとつのイントネーション単位にはひとつのピークが存在するというだけである」¹²と、この「ピークの位置がおおきく浮動することが観察された」とし、「このようなピークの浮動が何らかの語用論的意味とむすびついたものであるかどうかは不明である¹³」と続けている。一つの発話がいくつかの句に分けられるのは、どの言語でも同じであろう。東京方言にもその句に一つピーク「高いところ」が現われる。そして、そのピークの位置は、句を構成する個々の語のアクセントによって特定される。「てがみだした」が「てが／みだした」なら「てが[↑]み[↑]だ[↑]した」だし、「てがみ／だした」なら「てが[↑]み[↑]だ[↑]した」か「てが[↑]み[↑]だ[↑]した」（二度上がり）となる¹⁴。

秋山・吉岡（1991）は熊本方言の音声に関して、「音の高低がはっきりせず平たく流れる」（p.231）と言っている。田川・嵐（2010）はさらに詳細に句のピッチパターンを記述している。東京方言の場合、発話中の句が特定されれば、語アクセントの連なりから自動的に句のイントネーションが生成される。その句のピークが特定される。が、熊本方言では「ピークの位置がおおきく浮動する」。

このピークの浮動の様相をテ節について調査研究したのが、馬場（2004）である。

ここで馬場は、熊本市内方言話者の大学生 4 名の雑談 47 分を録音し、12,000 字の文字資料を作成、引用の助詞「て」を含む節について、その音調を記述した。そこで分かったことのいくつかが以下である。

○テ節の基本的な音調は「て」にむかってゆるやかに上昇し、「て」の直前で急に下降する。音調のこの下降が発話の中でのテ節の切れ目を

示す。「持つとかなんて^て聞^きいた」（音声 14 )

○テ節内にモダリティを表現する終助詞がある場合は、そこに音調のピークがくる。「いい^いなあ^あては思^{おも}って^てた^たんだ^だよ^よね」（音声 15 )

○より大きなイントネーション単位に組み込まれた場合、「て」の直前の下降はなくなり、テ節の音調はより大きなイントネーション句の一部となる。「仕事^{しごと}あ^あり^りませ^せんか^かて電話^{でんわ}した^{した}ら^らあ^あ」（音声 16 )

今後、この「ピークの浮動」が「語用論的意味とむすびついたものであるかどうか」を検証すると同時に、かかり受け、プロミネンス、発話の機能、発話者の感情などとの関係を明らかにしていきたい。

7. 語アクセントとイントネーションの関係；競合か非競合か

定延（2013）は、「共通語における語彙的アクセントとフレージャルなイントネーションは、基本的に非競合的と考えられてきた」が、排他型は「これまで伝統的に考えられていたよりも、頻繁に幅広く観察できる」、だから、「語彙アクセントとイントネーションの関係について、競合説を提案する」と述べている。

馬場・宇佐川（1993）は、「腿」と「桃」それぞれを断定と問いかけのイントネーションで発話した音声（「腿。」「腿？」、「桃。」「桃？」）を分析し、語アクセントと発話イントネーションとの関係を記述した。高低アクセントの「腿」に文末上昇の問いかけ発話イントネーションがかぶさったとき、どちらかが他を排するのではなく、発話末でいったん下がりがりそして上昇する、また、低高アクセントの「桃」に問いかけ発話イントネーションがかぶさったとき、第1拍から2拍へのピッチ上昇は大きくなる。語アクセントと発話イントネーションとは、競合せず、連なったり融合したりすることを明らかにした。

しかし、定延（2013）によれば、融合するのは「実験室的環境では被験者はふつう強い気持ちを示さないせい」だろうという。定延（2013）は、

母親がエミという娘を冗談でこわがらせてやろうとしている際の発話「エミのお手々食べちゃうぞー」を例にあげ、この発話のピッチが90Hz前後から110Hz前後まで2秒ほどかけてなだらかに上昇しており、「エ⁷ミ」や「食⁷べちゃう」などの語アクセントの反映は見えてとれないことを示している。

伝統的方言学では、「特別のイントネーションが加わらない丁寧な発音による型（反省的型）」こそが語アクセントであるとする考え方もあり、そうすると、定延（2013）は端から議論の対象とはなり得ない。

しかし、コミュニケーションを視点に持つかぎり、そして、言語記号はコミュニケーションのために存在するのだと考えるかぎり、つまり、日本語教育の立場から日本語を科学的に見ようとするかぎり、あらゆる場面の発話を、言語現象をつぶさに観察し、分析、記述しなければならない。そうしないと、学習者に教えられない。

8. 無アクセント方言における音調研究

トルベツコイ（1980）は、「5 韻律的特徴」の「a）文音調」で「所与の言語において、文の区別に用いられる韻律的対立が同時に単語の区別にも使われるかどうかという点で、基本的な区別をしなければならない。文を区別する対立が単語を区別する機能を果たさない場合には、その対立の利用については何ら特別の制限は要求されない。しかし、文を区別する対立が同時に単語をも区別する場合には、これら2つの機能が交叉し、一方が他方に従属することから、時には非常に複雑な状態が生ずる。」p.214、と指摘している。東京方言の場合、語、句、発話の区別には物理現象としてのピッチが大きくかかわっている¹⁵。この「韻律的特徴」が「文を区別」し、「単語を区別する機能を果た」し、さらに、発話構成要素の切れ目、かかり受けから感情まで多種多様なものを表現している。

熊本方言に本当に語アクセントが存在しないなら、「2つの機能が交叉」することはなく、それが原因で「非常に複雑な状態が生ずる」こともな

い。熊本方言の音調を研究することにより、東京方言、あるいは、日本語の音調の研究がさらに深まる可能性がある。

そして、何より、熊本方言の学習に役に立つ。

9. そして、これから

歴史的には『類聚名義抄』（12世紀初め）、『日本書紀』（前田家本、11世紀）などにさされた声点があり、共時的には豊かな方言があるため、日本語の語アクセントの研究は長く、広く、深められてきている。

しかし、少なくとも日本語の場合、語、あるいは、文節のアクセントをならべただけでは発話全体の音調は表現できない。文脈を考えず「ぼんやりあかるいだけだわ」、「マツノムシも水の中にくらす虫です」と発音したのでは、まさに棒読みである。

人間が外界から刺激を受けて何かを表現するとき、自らが有する言語資源を組み合わせて音声として発する。音声には必ず音調がともなわねばならず、それは、語アクセントに句イントネーション、発話イントネーションがかぶさっている。文脈、発話場面、発話意図によって「ぼんやりあかるいだけだわ」、「マツノムシも水の中にくらす虫です」の中の「あかるい」、「くらす」、「虫」ようにその語のもつアクセントを失うこともある。語アクセントは社会的に決まったものなのだが、発話が発せられた時に語に割り当てられる具体的な音調はその語のアクセントの型そのままとはかぎらない。

トゥルベツコイ（1980）が韻律的特徴について「「文＝音声学」に関して現在得られる記述では、大部分の場合、音声の叙述機能、呼び掛け機能、表出機能の区別が全くなされていない」（p.213）と指摘しているが、これは21世紀の現在でも言えるであろう。「4. 音調の機能」で述べたように、東京方言では、音調が多くの機能を負っているのである。これらの機能と音調との関連を明確にする、あるいは、音調のさらなる機能を明らかにするには、川上（1995）、Pierrehumbert（1980）のように、語アクセン

トの高低と句イントネーション、発話イントネーションの高低とを統一的に観察、記述、そして、理論構築する必要がある。

句イントネーション、発話イントネーションの研究は容易ではない。とくに、熊本方言の場合はなおさらである。

「6. 熊本方言の音調」では、プロミネンスを表現できないと述べたが、別の方言話者によると「はしとは言いよらんよ（箸／橋とは言っていないよ）」では「はし」に重きがあり、「はし[↑]とは言いよらんよ」では「言いよらんよ」に重きがあると言う。「重き」は「プロミネンス」だと解釈できるから、熊本方言でもプロミネンスを音調だけで表現できることになる。また、何でもスプーンで食べようとする子どもに箸を使うように言ってくれとの要求に「は[↑]しばつかわん[↑]とお？」と答えた熊本方言話者が次の瞬間には「は[↑]しばつかわん[↑]とお？」と発音する。人により言うことがことなり、また、同一の被験者であっても聞くたびに発音が変わる。これが「型知覚がない」ということなのだろう。

熊本方言話者に型知覚があろうとなかろうと、言語コミュニケーションをとっていることは明らかである。音調が何らかの機能を果たしているに違いないし、そこには規則がなくてはならない。どのような規則が働いているかを解明し、日本語教育に役立てたい。

まずは、熊本方言話者からの聞き取りを丁寧に行い、聴取実験を重ねていく必要がある。

注

1：英語では「présent」（現在の、プレゼント）、「présent」（ものを贈呈する）、ポルトガル語では「sábia」（学識のある女性）、「sabia」（動詞「saber（知る）」の直説法不完全過去1人称、3人称単数）、「sabiá」（鳥の種）。

2: ここでは、発話を構成する意味のまとまりを「句」としている。社会的に決められた語の高低の型を語アクセント、実際の言語生活で句、発話に付与された音調をそれぞれ句イントネーション、発話イントネーションと呼び、語、句、発話という単位に関係なく音声言語にあらわれる高低のつらなりを音調と呼んでいる。句イントネーションの機能は意味のまとまりを示すことであり、発話イントネーションのそれは、大まかに、プロミネンスと発話機能を示すことである。

語アクセントは *langue* 的、音韻論的なもので、実際に発話されたところにあられる句イントネーション、発話イントネーションは *parole* 的、音声学的なものだと考えられる。

3: 「手紙出した」なら「テ[↑]ガミ[↑]ダ[↑]シタ[↑]」、「手が乱した」なら「テ[↑]ガミ[↑]ダ[↑]シタ[↑]」。「食べ、終わった」なら「タ[↑]ベオ[↑]ワツタ[↑]」、「食べ終わった」なら「タ[↑]ベオ[↑]ワツタ[↑]」。東京方言の音調規則によれば、「〇[↑]〇〇〇[↑]〇〇〇[↑]」と発音されれば、「〇[↑]〇[↑]」と「〇[↑]〇〇〇[↑]」の二つの音連鎖に区切られる。一つの音連鎖に高いところは一つしかないし、1 拍目と 2 拍目とは必ず高さがことなるからである。

4: 「やせた女」なら「ヤ[↑]セ[↑]タ[↑]オ[↑]ン[↑]ナ[↑]ノ[↑]コ[↑]ド[↑]モ[↑]」、「やせた子」なら「ヤ[↑]セ[↑]タ[↑]オ[↑]ン[↑]ナ[↑]ノ[↑]コ[↑]ド[↑]モ[↑]」、「きのうもらった」のなら「キ[↑]ノ[↑]ウ[↑]モ[↑]ラ[↑]ツタ[↑]ホ[↑]ン[↑]ヲ[↑]ヨ[↑]ミ[↑]マ[↑]シタ[↑]」、「きのう読んだ」のなら「キ[↑]ノ[↑]ウ[↑]モ[↑]ラ[↑]ツタ[↑]ホ[↑]ン[↑]ヲ[↑]ヨ[↑]ミ[↑]マ[↑]シタ[↑]」。

5: 誰が好きなのかに焦点があるときは「タ[↑]ナ[↑]カ[↑]サ[↑]ン[↑]ハ[↑]コ[↑]ー[↑]ヒ[↑]ー[↑]ガ[↑]ス[↑]キ[↑]デ[↑]ス[↑]カ[↑]」のように「田中さん」の句頭上昇のピッチ差が大きくなり、何が好きなのかに焦点があるときは「タ[↑]ナ[↑]カ[↑]サ[↑]ン[↑]ハ[↑]コ[↑]ー[↑]ヒ[↑]ー[↑]ガ[↑]ス[↑]キ[↑]デ[↑]ス[↑]カ[↑]」のように「コーヒー」の低と高、そして、高と低とのピッチ差が大きくなる。ただし、ここでは音調だけを取り上げているが、プロミネンスの実現には、強さや話速、声色なども影響する。

6: プロミネンス同様、音調だけでなく、強さや話速、声色などが影響するし、話者の感情を表現する場合にはなおさらである。

7: 感情表現は複雑で簡単には言えないが、「軽いあいづち、無関心、気軽にたずねる、がっかりして」などの場合は最高、最低の差が小さく、

「うたがって、感心して」で感情が昂ぶると最高、最低の差が大きくなる。また、高揚した感情「感心して」では全体的に高く、一方、「がっかりして」では低くなる。

8：驚きで全体に上昇するのは話者の感情の昂ぶりの表れであり、命令で下降するのは聞き手への念押しの表現であろう。

9：「熊本⁷県立⁸大学」のように二つの要素に区切ると、「県立」であることが強調される。プロミネンスは、ピッチ差を大きくすることと同時に、音調によって切れ目を入れることでも表現される。

10：*Grundzüge Der Phonologie* が出版されたのは 1958 年だが、参照したのは 1989 年版である。

11：ソウル方言、フランス語も音調は語義を弁別しない。ということは、トルベツコイの論を音調に拡張した場合、*distinktive Funktion* より *kulminative Funktion* と *delimitative Funktion* の方が重要だという可能性があることになる。

12：秋山（1991）によると、「話者が任意に語勢をこめる」（p.231）場合、「拍に強さアクセント（stress）がおかれ」る。

13：前川・吉岡（1997）は、発話の丁寧さと発話イントネーションとの関係を調査、記述している。

14：注 3 を参照。

15：語、句、発話はそれぞれがまとまりを示されねばならず、「区別」において、語は語義が、句は語の間のかかり受けが、発話はその機能が区別されねばならない。

参考文献

- 秋山正次・吉岡泰夫（1991）『暮らしに生きる熊本の方言』熊本日日新聞社
- 馬場良二（2004）「熊本方言における引用の助詞『て』を含む節の韻律について」『電子情報通信学会技術研究報告』Vol. 104, No. 148（SP2004-21）

- 馬場良二・宇佐川毅（1993）「2 拍語 1 語文におけるアクセントとイントネーションの関係」『日本音響学会講演論文集』1993 年 10 月
- Karl Bühler, Sprachtheorie（1934）Die Darstellungsfunktion der Sprache
- カール・ビューラー（1983）『言語理論—言語の叙述機能』クロノス
- 川上泰（1975）『日本語アクセント法』学書房出版
- 川上泰（1995）『日本語アクセント論集』汲古書院
- 郡史郎（2006）「熊本市および周辺の非定型アクセント方言における語音調と音調句の形成」『音声研究』10: 2
- 国語学会（1980）『国語学大辞典』東京堂出版
- 九州方言研究会（1991）『九州方言の基礎的研究改訂版』風間書房
- 前川喜久雄（1997）「アクセントとイントネーション—アクセントのない地域—」『日本語音声 [1] 諸方言のアクセントとイントネーション』三省堂
- 前川喜久雄・吉岡泰夫（1997）「発話の丁寧さに関与する語彙的要因と韻律的要因の関係：熊本方言における終助詞とイントネーション」第 64 回日本語方言研究会研究発表会
- J. Pierrehumbert（1980）*The Phonology and phonetics of English intonation*, MIT diss.
- 定延利之（2013）「日本語のアクセントとイントネーションの競合的關係」『日本語音声コミュニケーション』第 1 号，日本語音声コミュニケーション研究会 (<http://www.speech-data.jp/nihonsei/seika.html>)
- 佐藤喜代治編（1977）『国語学研究辞典』明治書院
- 田川恭識・嵐洋子（2010）「熊本方言の談話音声に現れた音調句の分類—若年層話者による音声資料をもとにした中間的考察—」『音声研究』14: 3
- N. S. Trubetzkoy（1989）Grundzüge Der Phonologie, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen
- N. S. トウルバツコイ（1980）『音韻論の原理』岩波書店